

## 『風に紅葉』補遺

二年足らず前に鈴木泰恵との共編著『校注 風に紅葉』(新典社 二〇一二・10。以下、共編著と称する)を刊行したが、頭注のスペースから考えて充分意を尽くせなかった個所があったために、それらの補足説明をするともに、その後、訂正を含め新たにいくつかの問題点を見出したので、それらに対する愚考を示しておきたいと思う。なお、『風に紅葉』の本文は前述の共編著により、算用数字は巻、漢数字は該当ページを示す。また、参照した注釈書等は左記のものであるが、略記号で示すことにする。

④辛島正雄「校注『風に紅葉』―巻一―」

〔文学論輯〕第三十六号 一九九〇・12

⑤辛島正雄「校注『風に紅葉』―巻二―」

〔文学論輯〕第三十七号 一九九二・3

⑥関恒延『風に紅葉』

〔教育出版 一九九九・1〕

⑦中西健治 校訂・訳注『風に紅葉』

(中世王朝物語全集15に所収。笠間書院 二〇〇一・4)

### Ⅱ 『夜の寝覚』の影響

巻二冒頭で主人公(以下、男君と称する)の父親関白に対する提言によ

って、父親の兄太政大臣に関白職が移譲され、その北の方の継子梅壺女御が立后した記事の後に、

### 大倉 比呂志

①殿の上(北の方)は二品の位賜りて、中宮(梅壺女御)の御母の儀式にて、輦車許りて参りまかでし給ふに、限なき上(帝)は御覧じて、限りなう御心移させ給へりけるよし、内大臣(男君)も聞き給ひて、をかしう思しけり。(2・五七)

とあるように、北の方が参内したところ、帝の眼にとまったと語られている。傍線部では帝の好色性が照射されており、それ以前においても「上は限なうおはしまして、采女が際までも、容貌をかしきをば御覧じ過ぐさず」(1・一四)や「上はげに御色好みにて」(1・三三)とある点からも、帝の好色性が強調されている。この記事は以下に述べるごとく、『夜の寝覚』における帝と寝覚君との状況が影響を及ぼしていると考えられる。中間欠巻部分によれば、帝は寝覚君の入内を切望していたものの、父入道に謝絶された後、寝覚君は主人公の子(注―まさこ君)を身ごもったまま老関白と結婚することになる。その老関白の死を契機に寝覚君を恋慕していた帝は改めて寝覚君に尚侍として参内することを求めたが、彼女はそれを固辞し、巻三でその代わりとして老関白の長女が尚侍となり、その付添いと

して寢覚君も参内することになる。そのような状況のもとで、男主人公の寢覚君への恋着を断ち切って、男主人公と結婚している大皇宮所生の女一宮への愛情を呼戻そうとする目的で、大皇宮は帝に寢覚君を垣間見させ、執着させる策略を用いるのである。その結果、帝は寢覚君のもとに闖入するものの、寢覚君に拒絶される。これは帝が継子の長女の尚侍ではなく、その継母に当たる寢覚君に恋着するという話筋であり、『風に紅葉』の帝も梅壺女御（後に中宮）ではなく、継母北の方を恋着するという話筋と類似しているのだ。と同時に、帝と北の方の継子である梅壺女御と、尚侍との情交は当然成立しているものの、帝の、継母である北の方と寢覚君との情交はなく、あくまでも恋着で終わっている状況とが両作品において類似している点を看過すべきではなからう。以上のことから、『夜の寢覚』の話筋が『風に紅葉』のそれに影響を与えていると考えるべきではなからうか。

### ② 『堤中納言物語』「はなだの女御」と

#### 「花桜折る少将」との関係

#### ①「はなだの女御」との関係

男君は二月に太政大臣邸の梅見の宴に招かれ、北の方と情交を結んだ後、三月上旬を過ぎた夜、内裏からの帰途、太政大臣邸を訪れたところ、琴の音にひかれて、北の方をはじめ、継子に当たる梅壺女御・麗景殿女御や、実の娘である小姫君を垣間見る件が語られている。この記事はある好色者の男が「やむごとなきところにて、物言ひ懸想せし人は、このごろ里にまかり出でてあなれば、まことかと行きてけしき見むと思」って、垣間見たところ、二十余人の姉妹たちが一堂に会し、自分たちの仕える各々の女主人を花になぞらえて談話していた「はなだの女御」の個所と類似してい

る。とすれば、一人の女性だけを垣間見たのではなく、数多くの関係のある女たちを垣間見たという点において、両作品の関係が考えられるのではないのか。

#### ②「花桜折る少将」との関係

男君は再訪した聖の「『明けん年、君の限りなき御慎みなり。心ばかりは祈誓し申しはべればにや、助からせ給ふべきよしの夢想は侍りしかど、大きな御嘆きなどや侍らん。なほも御心許しはべるまじくなん』（二・六三）という警告を受けて、加行に専念しようとして、暇乞いのために麗景殿女御のもとを訪れた件は次のように語られている。

②（男君ハ）こぼるる涙をためらひつつ、入りおはしたれば、例の空薫物の薫り心にくうくゆり満ちて、冴えたる月影限なうさし入りたるに、御褥さし出でたり。近頃はかやうにことごとしきさまにもなかりしを、心づきなさにしなさるるよ、とはほ笑まれ給ひて、用意ことに振る舞ひ給ひつつ、「宵の間に明けぬるにや、と過たればべる月影に、いとどまばゆき御もてなしこそ」と（男君ガ宰相の君ニ）のたまへば、……（二・七九）

とある傍線部は既に共編著の頭注に「夜が明けていないのに明けたと勘違いされる月の光の状況は、『花桜折る少将』の冒頭と類似する」と指摘しておいたわけだが、少々説明を付け加えておくことにする。それは、

③月にはかられて、夜深く起きにけるも、思ふらむところいとほしけれど、たち帰らむも遠きほどなれば、やうやうゆくに、……

の個所を念頭に置いて語られていると考えられる。中将は途中で気が付いて、現在進行中の女のもとに引き返すこともできたわけだが、そうしな

ったのは、この女が中將にとって愛情の対象となる女ではなく、性の対象としての女にすぎなかったのではないのか。それは、麗景殿女御が男君に首ったけで、「心に入れずは見えじ、と折を過ぐさず（男君ハ）訪れなどはし給へど、こなた（注―麗景殿女御）の御心ざしの十が一だにあらじとぞ見ゆる」（1・三三）とあるごとく、男君にとって麗景殿女御は愛情を向けるべき対象ではなく、あくまでも性的関係の対象者にすぎなかったことと同趣向であったのだ。そのような意味において、現在進行中の女と麗景殿女御とは同じ範疇の女だったのであり、そこに『風に紅葉』の該当箇所における「花桜折る少将」の冒頭部分撰取の意味を読み取っておく必要がある。

\* \* \*

ちなみに前述の三作品のうち、文永八年（一二二一）に成立した『風葉集』に物語中の歌が採られているのは「花桜折る少将」のみである。それは、

④ 花の散るころ、人のまうできたりけるに

花桜折る中將

散る花を惜しみおきても君なくはたれにか見せむ宿の桜を

とあり、詠者名が「少将」ではなく、「中將」とあって、問題が残るもの<sup>注①</sup>、前述した『風に紅葉』の引用文②の傍線部の個所は「花桜折る少将」の影響を蒙っていると考えておいて差し支えなからう。ところで問題となるのは、『風に紅葉』と「はなだの女御」との関係についてであるが、『風に紅葉』の成立年代を明確にはしたいものの、南北朝期頃であると推定されている<sup>注②</sup>。一方、「はなだの女御」の成立は諸説が提示されているもの<sup>注③</sup>、決定には程遠い現状である。『風に紅葉』と「はなだの女御」との

成立の前後関係は不明であるといわざるをえないが、現在のところ、「はなだの女御」が『風に紅葉』に先行したと考えておいた方が蓋然性が高いのではないかと推察される。

### Ⅲ 遣児若君の造型―『源氏物語』の影響を中心に―

男君は妹の宣耀殿女御（後に弘徽殿中宮）が二度目の懷妊をして、衰弱した結果、唐から帰朝した効験のある聖に加持祈禱を依頼するために、難波に赴いた際、亡き兄権中納言の遣児若君に会った折の印象は、

⑤ 限りなううつくしげなる女のささやかなるぞ居たる。いと覚えなくて、近く

寄りて見給へば、十一、二ばかりなる人の、白き衣に袴長やかに着て、髪

裾は扇を広げたらんやうにをかしげにて、容貌もここはおぼゆる所なく、

一つづつうつくしなどもなのめならず。さるは、我が御鏡の影、女御などに

ぞおぼえきこえたる。（1・三九）

と語られ、男君は遣児若君との同性愛に耽った後、都に連れ帰ることになる。ところで『源氏物語』若紫巻において、光源氏は瘡病に対する加持を施してもらうために、お忍びで北山の聖のもとを訪れるわけだが、そこで小柴垣のある瀟洒な建物を垣間見た折の描写は、

⑥ きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかりや

あらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

とあり、光源氏は紫上に釘付けになる。引用文⑤と⑥の傍線部における遺児若君と紫上とに関する類似的表現により、『源氏物語』若紫巻が『風に紅葉』に影響を及ぼしていると考えられる。その後、光源氏は紫上の祖母尼君に彼女を都に引き取りたい旨を申し入れるが、紫上が幼少だという理由で固辞され、祖母尼君の死後、紫上の父親兵部卿宮に引き取られる寸前に、二条院に拉致した結果、「(光源氏ガ)ものよりおはすれば、(紫上ハ)まづ出でむかひて、あはれにうち語らひ、御懷に入りて、いささかうとく恥づかしとも思ひたらず」と語られている。これは『苦しきに、いざ休まん』とて、(男君ガ遺児若君ヲ)かき抱きて臥し給へば、疎く恐ろしげも思はず、うち笑みてかいつきて寝給へり」(1・四〇―四一)と語られているのと同趣の状況であると考えることができよう。このように、北山と難波で暮らしている人物(紫上と遺児若君)が主人公(光源氏と男君)に引き取られ、溺愛されるという点において、話筋の類似性を見るのである。

さらに巻一の巻末近くで、男君が遺児若君を溺愛する件は、

⑦(男君ハ)この君(遺児若君)をうちも置かず、「いで、鉄漿つけたる口見ん。今少しをかしげにこそ見ゆれ。いづくにても久しうなれば、待ちやすらん、など心に離れぬこそ。これぞほだしなるべき。……」(1・四九)

とあり、男君にとって遺児若君は離れることのできない足かせであると語られているのだ。この傍線部「ほだし」なる語は、光源氏が雲林院で経文を学習して二条院に帰ることは面倒になったけれども、「人ひとりの御事思しやるがほだしなれば、久しうもえおはしまさで、寺にも御誦経いかめしうせさせたま」(賢木巻)うて、結局帰ることになる件においても用い

られている。傍線部は光源氏が紫上を恋慕する気持ちが持続して、それが障害となって雲林院に滞在できないと語られているのだ。とすれば、男君と光源氏にとって遺児若君と紫上が切っても切れない関係であったと考えられ、遺児若君の造型と紫上のそれとの類似性を見るのである。

また、男君が遺児若君を妹の宣耀殿女御と対面させる件は、

⑧「あなた(注一一品宮)におはすると、(宣耀殿女御トデハ)いづれかまさりて見たてまつる」と(男君ガ遺児若君ニ)のたまへば、(遺児若君ハ)うち笑みて、「それ(注一一品宮)もよくおはすれど、これ(注一宣耀殿女御)はなほ類なくこそ。君に似給へるは、同胞な」とのたまふ。……(遺児若君ハ)ただ女のやうにてまことにうつくしう、(宣耀殿女御ガ遺児若君ヲ)颯らまほしければ、(遺児若君ノ)御眉作りなどは(宣耀殿女御ガ)御手づからせさせ給へば、(遺児若君ハ)御手をばみなねぶりはし給ふ。「かく性なくは、今はいろはじ」とて、大納言の君にせさせ給へば、「今はさせじ。御手づからせせずは泣かんぞ」とて、大納言の君の手をばへし除け給ふ。(1・四六―四七)

とあり、傍線部⑥のように、遺児若君が大納言の君ではなく宣耀殿女御に眉作りをしてもらいたいために、女御に対して積極的な態度を取るわけだが、これ以前に太政大臣邸における梅見の宴の件でも同様な描写がなされている。すなわち、

⑨「御賄ひを宮仕ひ初めにも、それや」と大臣の上(北の方)に聞こえ給へば、(北の方ハ)居ざり寄りて、銚子取りて奉り給へば、大将(男君)居直りて、色許りて見ゆる女房を、「こちや。いかが、さることは」とのたまへど、(北の方ハ)なほ押さへて奉り給ふを、……(1・二〇)



とあるごとく、北の方が男君に積極的な振舞いをするわけだが、それは直前に太政大臣が北の方との間の娘である小姫君の世話を男君に依頼したので、「(小姫君ヲ)うち見やりきこえ給へる(男君ノ)匂ひ、有様に、魂もやがて消え惑ふばかり、現し心もなくぞ上(北の方)はおぼえ給ふ」(1・20)と男君に恋着しているからこそ、傍線部⑩のように、北の方は積極的な態度に出たのだ。その結果、

⑩ 酔ひ少し進みぬるまめ人(注―男君)の御心もいかがありけん。夕月夜の影はなやかにさし入りて、梅の匂ひもかことがましきに、姫君(注―小姫君)の御新枕にはあらで、あやしの乱りがはしきや。(1・21)

とあるように、男君と北の方との間に密通が成立する。一方、引用文⑧の二重傍線部のごとく、遣児若君が宣耀殿女御の美しさを認識したからこそ、宣耀殿女御の手を積極的なめまわしたと前述の北の方の行動の積極性とは関連してくるのではなからうか。とすれば、遣児若君と宣耀殿女御との間には密通の可能性が招来されてくるのではないのか。そのうえ、引用文⑧⑨には類似点が看取される。男君に対して積極的な行動を取る北の方と宣耀殿女御に対する態度が積極的な遣児若君が対応していると同時に、北の方と遣児若君の代替者である「色許りて見ゆる女房」と大納言の君が各々対応しているのであって、いわば二組の人物が対応関係にあるという点を見過すべきではなく、前述の二つの記事における類似性を注視すべきだろう。ちなみに、密通の可能性という点では、野分巻で野分の余波のために簾がめくれ上がった瞬間に夕霧が紫上を垣間見てとりこになる点を重視すべきだろう。そのように考えれば、遣児若君と宣耀殿女御との間に密通の可能性が大きくなるはずだ。

さらに、密通の可能性という点に注目すると、帝が中宮(後に女院)を男君から隔離したことが執拗に語られており、それらは、

⑪ この(一品宮ノ)御さまをも中宮の常にも見きこえ給はず、うとうとしきを、大将(男君)は、などかくはおはしますぞ。心つけ顔に上(帝)の(中宮ト男君トノコトヲ)思し疑ふなるぞをかしき。思ひ寄るほどのことかは。七、八ばかりにて(男君ガ)童殿上して参り給へりける折、つくづくと目離れなくまもりきこえ給へりけるを、上の御覧じて、「心のつかんままに、誰がためもよしなし」とて、御入り立ちは放たれ給ひにけり。(1・三四)

⑫ 『なにがしは幼くて、中宮をつくづくと見きこえたりけるにこそ、(帝ガ)『行く末推し量らる』とて、長く御入り立ちは離れきこえたれ。この有様(注―遣児若君が宣耀殿女御の手をなめまわしたと、春宮の御前にて人々学びきこえ給ふな。(春宮ハ)いかにも悪しく思さんぞ。されど、これ(注―宣耀殿女御と遣児若君)は御同胞(注―男君は遣児若君を父関白の子として披露している)なれば。大臣(注―男君の父親関白)は中宮にもさてこそおはすめれ。なにがしが一つ隔てある身になりて、もの狂ほしく、御子と同じほなるものを、思し疑ふ上(帝)の御心こそけしからね。されど、げにすぐれ給ひなん人(注―女性)は、見ん人(注―夫)苦しかるべし」とて、(男君ガ遣児若君ヲ)うち見やりきこえ給へば、……(1・四八)

⑬ 皇太后宮(注―もとの中宮)の御あたり、(院ガ)例の雲居はるかにもてなさるを、(男君ハ)いともものし、と思しつつ、女宮(一品宮)に「かやうになれば、さもありぬべきことからと、心も尽きておぼゆる。同じくは、さらばこのほどに導かせ給へかし。御鏡の影に似きこえさせ給へりや」などのたまひるたれば、……(2・五八)

とあるわけだが、三例の引用文の傍線部に表象されているように、帝は美貌の中宮とその甥に当たる男君との密通の不安に駆られて、男君の中宮に対する接近を禁じたのだ。これは桐壺更衣の死後、桐壺帝のもとに藤壺が入内するわけだが、光源氏が元服してからは「ありしやうに、（藤壺ノ）御簾の内にも入れたまはず」とあるように、元服以前には桐壺帝が光源氏を藤壺のもとに連れて行ったことに對する反措定であると考えられよう。その藤壺は「いと若うつくしげにて、切に隠れたまへど、おのづから漏り見たてまつ」（以上、桐壺巻）り、典侍が藤壺は光源氏の亡き母桐壺更衣に相似していること（〈形代〉）を話したとことと相俟って、藤壺への恋慕を募らせ、密通に至るのである。帝が男君を中宮に近付けないようにした根底には、この光源氏と藤壺とのことが念頭に置かれていたはずだ。

ところで、『風に紅葉』において男君と北の方・梅壺女御・麗景殿女御との密通並びに男君と中宮、遣児若君と宣耀殿女御の密通の可能性が語られているわけだが、それは数の上からはるかに『源氏物語』を凌駕しており、いわば『源氏物語』の密通を先鋭化したのが『風に紅葉』ではなかったのか。<sup>注⑥</sup>

#### 四 男君の父親に對する提言をめぐって

— 卷一卷末との関わり —

卷二冒頭において、男君は父親に兄太政大臣に関白職を移譲するように提言しているわけだが、そのことを息子から提案された父親の様子は、

⑭げにも、この風情思ひ寄らざりけり。親なれど、我が心はむげに言ふかひなし。かやうにのみあまりこの世の人にあまり給へる（男君ノ）御やうを、

かへりては危なく、空恐ろしくさへ思して、うち泣かれ給ひぬ。（2・五四）とあるように、父親が気付かなかった点を述べた男君の奇特さが語られ、さらに、「上も、『例のこの大将（男君）の計らひならん。なべてならぬ人のさまかな』とぞ仰せらるる」（2・五四）と、傍線部のごとく、帝の男君に對する賞讃が語られてもいる。ではなぜ父親と帝の視点から男君が賞讃されているのか。それは卷一卷末において「愛し入りて」（1・五〇）に表象されているように、男君が遣児若君を溺愛し、同性愛に耽る痴態を相対化するために、卷二冒頭で対極的な男君が意図的に語られたのではあるまいか。

#### 五 男君と前斎宮との関係

斎宮の役目を終えて出家した前斎宮が琴の名手であるために、一品宮所生の姫君にそれを習わせる目的で男君が前斎宮を自邸に招いたところ、男君に恋慕した前斎宮の顕著な態度が見受けられ、一品宮もそれを看取し、男君自身も不審に思っていたので、一品宮に對して次のような発言をする。

⑮「いかにも魔縁のしわざとおぼゆる。これほど色も情けもなく、女をば恐ろしげにのみ振る舞ふが、なかなか珍しくて、尼衣の袖ひきかけんと思すにや。げにちと申しかかりて後には、教化したてまつらんよ」とて、（男君ハ）笑ひきこえ給ひつつ、……（2・五九・六〇）

この傍線部の解釈として、

◎普通の女よりかえって珍しくって、尼の法衣の袖を共に掛けて後朝をとお思いなのですか。

⑩これほど色も情もなく、女性を恐れているようにばかり振る舞っているのが、かえって珍しくて、尼衣の袖をひきかけようと思いのだろうか。

と訳されている。⑩の考えに近いが、

※前斎宮は出家の身であり、私が女性を恐れているような態度を示しているから、前斎宮は珍しいことだとかえって安心して、私に近付こうと思いのだろうか。

という試解を示しておくことにする。

さらに、男君は前斎宮が考えていた清浄な生活を送るように悟した後に、

⑩(前斎宮ハ)身に染みて恥づかしう、「思ひ返さば」の御言の葉(注―この記事の直前における男君の前斎宮への返歌「かりそめの色に心を移さじと思ひ返せば返るならひを」の第四句)より、時の間に乱れける御心もひき直されて、あな恥づかしや、と(前斎宮ハ)思しなられ給ひぬれど、いかさまにも常に(男君ニ)向かはまほしう懐かしき御心は失せず。我ならぬ人はさてやは果てまし、と行く末も後ろめたう思ひきこえ給ふ。(2・六二)

と語られている。この傍線部中の「御心は失せず」に関して⑩⑪⑫いずれもが「御心は失せず」と読点としているが、以下に述べるごとく句点として考えるべきだろう。すなわち、「御心は失せず」までは前斎宮の心的状況が語られているのに対して、「我ならぬ人は」以下は男君の心中思惟が語られていると考えるべきではなからうか。したがって、「失せず」を境に主語が前斎宮から男君に移行しているのを見過ぐすべきではなからう。というのは、敬語の使用状況に照射していくと、例えば、

○大臣(男君)御心に入りたることにて、さし過ぎ(前斎宮ニ)気近く参り給ふを、……(2・五九)

○「さても御裳濯川の流れ清かりし御身なればとて、……」と(男君ガ前斎宮ニ)聞こえ給ふに、……(2・六〇)

○(前斎宮ガ)帰り渡り給ふにも、(男君ハ)様々の御贈り物たてまつり給ふ。(2・六一)

などとあるごとく、男君の前斎宮への行為に対してすべて謙譲語が用いられているからだ。その点から考えると、引用文⑩の傍線部の最後「後ろめたう思ひきこえ給ふ」には謙譲語「きこえ」が用いられているのであって、やはり男君が前斎宮のことを「思ひきこえ給ふ」と理解しなければなるまい。とすれば「我ならぬ人は」以下は、

⑩「私以外の女性なら、このままでは終わるまいに」と、将来の我が身も不安なほどに思い申される。

と解釈すべきではなく、

※私以外の男なら、このまま終わらずに前斎宮に手を出していただろうにと、男君は前斎宮の将来を不安に思い申し上げなさる。

としなければなるまい。したがって、共編著の「\*我ならぬ人はさてやは果てまし」の頭注として、

「私以外の男なら、このままでは終わるまいに」と主人公の心中思惟が語られている。主人公が前斎宮の将来を心配していると考えられる。また「私以外の女性なら、このままでは終わるまいに」と前斎宮の心中思惟として考へることも可能。

と記したが、傍線部分を削除した方が今まで論述してきたことからすれば、妥当であると考えられる。

#### ⑥ 男君と承香殿女御の異母妹の姫君（故式部卿宮の姫君）

##### との関係

男君は聖の警告により加行することになり、今まで関わって来た女性たちを訪問する目的で、里下りをしている承香殿女御の里邸を訪ねる。琴の音がかすかに聞こえる西の対を垣間見たところ、物思いに沈んでいる可憐な姫君を発見した。女房たちの内輪話により、その姫君は姉承香殿女御のもとに赴いた折、院が懸想したので、承香殿女御が憎悪して、姫君を隔離しているらしいと判明したものの、帰る気がせず、姫君のいる所に闖入し、情交を結ぶことになる。その姫君は男君にとって「あはれにらうたきことよそに見つるに千重まさりて、限りなき御心ざし」であり、「さしも宵の間のうたた寝にてのみ出で給ふに、鐘の音うちしきるまで立ち出づべき御心地もせぬ」（以上、2・六七）ような状態で、今まで経験したことのないほどの恋着が語られている。十一月末に男君は姫君を再訪し、帰り際に「下に着給へる白き御単衣を、『この暮れまでの形見に』とて、（姫君ニ）着せてまつり給ひて、女の御単衣の袖の綻びてまとはれ出でたるを取り給ひて」（2・七〇）、帰途に着くわけだが、この傍線部に関して次の記事が関わってくるのではなからうか。

⑦ 薄色の衣のなよやかなるを着て、琴をば弾きやみて、火をつくづくとながめて、いとも思はしげなるまみのわたり、あはれに懐かしう、らうたげなること限りなし。十二、三ばかりなる童と、また若やかになるとぞ、前に居たる

も、なよやかなる姿どもご覧じもならず、あはれげなり。（2・六五―六六）

とあるように、承香殿女御の里邸の離れを男君が最初に垣間見る件が男君の視線から語られている。二つの波線部「なよやかなる」は「着なれて糊気が落ちた装束」で、姫君と女房たちが「冷遇されていることを暗示する」（以上、⑧）とする考えがあるように、古びた衣装であるがゆえに袖が綻びたと考えられると同時に、「ほどなく明けゆく気色なり」（2・七〇）とある点から、男君は通常と異なって夜明けまでこの姫君のもとに滞在したのである。それは男君の姫君への恋着の表象であると同時に、明け方近くまでの激しい情事によって姫君の衣装が綻びたことが暗示されているのではなからうか。<sup>注⑦</sup>

ところで前述したごとく、男君は姫君の置かれている状況のある程度察知はしているものの、女房の口から「『去年のこの頃より、煩はしきこと出で来はべりて、かく離れたる方になんおはします。斎院（注―承香殿女御所生の女ニ宮）へ（姫君ヲ）渡しきこえんとぞはべる』』という情報を得ているわけだが、傍線部「煩はしきこと」とは院の姫君への接近を想定しておくべきだろう。というのは、その直後に語られている男君の発言「『采女、主殿司までご覧じ過ごさず、隈なき院の御心地にさぞ思されつらん。さりながら、三瀬川は、言ふかひなき身にたぐひ給ふべかりけるこそ』（以上、2・七〇）によって、院の好色性を取り上げられているからだ。だが、この発言の中で男君が姫君との「三瀬川」に触れているところから、『三瀬川』は三途の川。女は、死後この川を渡る時、初めて契りを交わした男に背負われて渡る、という俗信があった。姫君がこれまで処女であったことをいう（⑨）と指摘されているように、院は姫君に手を付けてい



ないことが理解される。とすれば、男君が「三瀬川」を口にしたことは、院に対していわば姫君の処女を奪取したという男君の優位宣言ではなかったのか。というのは、帝によるあてがいぶちの一品宮降嫁への屈辱を男君は晴らそうとしたものであると考えられるからだ。その根底には院によって男君への〈性の管理〉がなされてきたことに對する反発が内包されていたのではなかったのか。それゆえに、男君自身が初めて自分の方から〈女〉に對して積極的な行動を取ったのであって、いわば男君が〈性の被管理者〉から〈性の管理者〉へと転換した契機をもたらしたのがこの姫君であった点を看過すべきではなからう。<sup>注⑧</sup> だからこそ、男君は自分の管理のもとで姫君を隠れ家に置こうとしたのだ。その結果、男君の姫君に對する心の傾斜を看取した一品宮は「色変はるけしきの森は身一つに秋ならねどもあきや来ぬらん」(2・七三)の歌を手習い書きしたのだ。もちろん傍線部「あき」には「秋」と「飽き」とが掛けられてはいるが、実はこの歌は男君が聖の警告により加行を始める予定であると一品宮に報告した折に、一品宮が詠んだ「同じくは我先立たむ長らへば変はる心の色を見ぬ間に」(2・六五)という歌の波線部が「色変はる」歌のそれに移植されたのであり、一品宮は直感で男君との離別を感じ取っていたのではなからうか。と同時に、姫君が行方不明となった後、〈性の管理者〉という立場を喪失した男君は遺児若君に半ば強制的ともいえるような形でその立場を行使して、一品宮との情交を遂げさせた結果、一品宮は懷妊し、若君を出産後、苦悩のために死去するのであって、男君は正妻一品宮と「これやまことの恋の道ならん」(2・七八)姫君を喪失するのである。とすれば、男君の人生史は「風に紅葉の散る」(1・一一)ごときはかないものであったことが表象されているのであり、巻一冒頭で結末が暗示されているのではなからうか。<sup>注⑨</sup>

## ⑦ 男君と承香殿女御との関係

男君は恋慕する姫君が行方不明になった後、聖の警告により加行を始めることになり、承香殿女御を暇乞いのために訪問することになるわけだが、

⑮「この世に侍らんことも、むげに残り少なきやうに申し聞かする者の侍るにつきて、しばし籠りゐはべりて、行ひはべるべきいとま申しになん。大方、世のあぢきなさを限りにてもや」など(男君が承香殿女御に)聞こえ給ふには、(承香殿女御へ)せきあへずかなしうおぼえ給ふ。

「限りぞと思ひ思ひてたまさかに待ち見るほどぞ置き所なき

⑯ 命長さの例は、譲りきこえさせん」とも(承香殿女御へ)言ひやり給はず。

思はずになほ長らへば折々に隔て果つべき契りならぬを(2・七九―八〇)

と語られている。その前に承香殿女御は男君と姫君との関係に薄薄感付いており、男君も姫君とのことを「これやまことの恋の道ならん」(2・七八)と認識している点を考慮して、傍線部⑭⑯の解釈に関して述べていくことにする。⑭は男君の発言だが、

⑰「この『切ない恋』は、今日が最後と存じます。

⑱ ⑲ 遍く世の中の味気無さも、これを最後として。

と訳されている。男君は仏道修行をすることになるわけだから、ここは、※世の中がつまらないから、この逢引きを最後に出家してしまいたいのか。と言おうとしているのではなからうか。

また、⑲は承香殿女御が男君の発言に返答したもののだが、

⑳ 長命のモデルはできることならお譲り申し上げようとも思いますが。

㉑ 命長さの例は、あなたにお譲り申し上げましょう。

と訳されてはいるものの、充分に承香殿女御の心中が剔抉されていないのではなからうか。というのは、男君の承香殿女御に対する愛情度は「こなた（注―承香殿女御）の御心ざしの十が一だにあらじとぞ見ゆる」（1・三二）とあるように、十分の一以下であると語られているからだ。そのことを考慮に入れば、

※私はあなたに逢えない悲しみのために、死んでしまうかもしれませんので、長生きするということはあなたにお譲り申し上げます。

と訳すべきではなからうか。だからこそ、男君は「思はずに」の返歌で、自分が思いがけなく生きているならば、あなたと逢える可能性もあり、二人の縁が切れてしまったわけではないと慰撫しているのではなからうか。

#### 八 一品宮死去後の男君に対する女性たちの思い

男君は一品宮死去後に、官職を返上したために、院や帝が慰留した記事の後に、

①<sup>19</sup>今はさりととも、と過ぐる日数を数へ給ひつる心尽くしの人々の御心の内ども、いと心細し。（2・一〇七）

とある。今後男君は加行に邁進していくことが予想されるが、傍線部は、

②<sup>B</sup>いくら悲しいとは言え、四十九日もすんだことだし、もうそろそろお元気になるだろう。

③<sup>C</sup>今までは目を向けてもらえなかったけれどももしかしたら、……

④<sup>D</sup>「いくら悲しいとは言え、もうそろそろ」

と訳されている。直後に「心尽くしの人々」とあることから、男君を恋慕する女性たちの心中が語られていることになる。女性たちの心中では一品

宮死去によって男君との情事が実現できなかったために、それを希求していると考えられるので、

※いくら悲しいと言っても、四十九日も済んだことなので、そろそろ男君が逢いに来てくれてもいいのでは。

と考えるべきではなからうか。

『堤中納言物語』『源氏物語』とはずがたり』の本文は新編日本古典文学全集、『風葉集』のそれは岩波文庫『王朝物語秀歌選』(上)によるが、表記の一部を私に改めた個所がある。

注① 「花桜折る少将」には少将なる人物が登場していないために、一般的に中将の誤りではないかと推定されているのに対して、中野幸一『堤中納言物語』をめぐっての試論―はたして短編物語集か―（『学術研究』〈早稲田大学教育学部〉第四十三号 一九九五・2）は、この題名は中将と呼ばれる主人公の少将時代の物語に付けられたものであって、現存の物語はその一部であり、主人公の中将時代のエピソードを抄出したものだとして、『堤中納言物語』に所収されている物語は必ずしも短編物語とはいえないと述べている。これは「花桜折る少将」という題名に関する一つの解決策であるとは考えられるものの、確定には至っていない。

② 樋口芳麻呂「かぜに紅葉の典拠について」（『愛知大学国文学』第八号 一九六六・12）。なお、辛島正雄『いはでしのぶ』の影響作『恋路ゆかしき大将』と『風に紅葉』と（『中世王朝物語史論』下巻に所収。笠間書院 二〇〇一・9）は、鎌倉時代後半ないし室町時代と推定している。

③ 例えば新編日本古典文学全集『落窪物語 堤中納言物語』（稲賀敬二担当）では、「十一世紀中ごろの女房たちの関心を背景にして成立した作品」と記されている。

- ④ 遣児若君の美意識のありようは、引用文⑧の前半で宣耀殿女御の方が一品宮よりもはるかに美しいと語っているところからも理解されよう。
- ⑤ 高橋亨「可能態の物語の構造」〔源氏物語の対位法〕に所収。東京大学出版会一九八二・五。
- ⑥ 密通の多さという点からすれば、『我身にたどる姫君』を無視することはできない。したがって、『我身にたどる姫君』から『風に紅葉』へという系譜を考えておく必要があると同時に、同時代文学における密通描写（その可能性も含む）のあり方をも論じていくべきだろう。
- ⑦ 『とはすがたり』巻一において、後深草院が里下りをしている二条のもとを連続して訪れた二晩目に「今宵はうたて情けなくのみあたりたまひて、薄き衣はいたくほころびてけるにや、残る方なくなりゆくにも」とあるように、二条は身に付けていた衣装が綻びたと語られている。これは後深草院の二条に対するレイプによるものと考えられ、姫君の場合とは事情を異にするわけだが、情事と衣の状態との関係が注視されている。
- ⑧ 詳細は大倉『物語文学集攷―平安後期から中世へ』（新典社 二〇二三・2）第三部の三を参照されたい。
- ⑨ 冒頭において結末が暗示されているものとして「花桜折る少将」や「逢坂越えぬ権中納言」が想定される。詳細は注⑧「前掲書第一部の五の(2)と(4)を参照されたい。

（おくら ひろし 日本語日本文学科）